004 TICA

朝起きて、本屋に行って１冊の本を買い、喫茶店で５時間をかけて読む。
こんな幸せなことがあるのに、人はなぜ、他人が薦める旅行や食事やイベントに金を使うことが幸せだと勘違いしているのだろう　―　北野　武　－

題名	著者	データベースから	コメント
シャドウ	道尾秀介	小学生の凰介の母は病でこの世を去った。父と二人だけの暮らしが始まって数日後、幼馴染みの亜紀の母親が自殺を遂げる。夫の職場である医科大学の研究棟の屋上から飛び降りたのだ。そして亜紀が交通事故に遭い、父までもが……。父とのささやかな幸せを願う小学５年生の少年が、苦悩の果てに辿り着いた驚愕の真実とは？ ＊第７回本格ミステリ大賞〈小説部門〉受賞 ＊第３位『2007 このミステリーがすごい！』 ＊第６位『2007 本格ミステリ・ベスト 10』 ＊第 10 位『週刊文春』「2006 ミステリーベスト 10」	ミスリードしようという魂胆がよく見える。これだけの賞を取る話とは思えないなぁ。今回の直木賞ノミネートにも「鬼の足跡」がはいっていた。私がずれているみたい。
背の眼	〃	ホラー作家の道尾が耳にした霊の声と、自殺者の背中に写る眼。すべてが繋がったとき、血塗られた過去に根差した悲愴な事件の真実が明らかになる。第５回ホラーサスペンス大賞特別賞受賞作。	
ラットマン	〃	結成１４年のアマチュアロックバンドが練習中のスタジオで遭遇した不可解な事件。浮かび上がるメンバーの過去と現在、そして未来。亡くすということ。失うということ。胸に迫る鋭利なロマンティシズム。注目の俊英・道尾秀介の、鮮烈なるマスターピース。	
なぜ君は絶望と戦えたのか～本村洋の 3300 日～	門田隆将	判決、死刑―。最愛の妻子が殺害されたあの日から、九年。司法への義憤を抱え、時に死すら考えながら、長き日々を苦闘し続けた、一人の青年の軌跡。光市母子殺害事件を圧倒的な事実と秘話で綴る感動の記録。	突然家族を亡くした夫の行動は感動という言葉ではすまされない。強い人のように思えるけれど、ただひとつの結論にむかっていつもまっすぐに挑む姿勢に泣けた。

パラドックス１３	東野圭吾	１３時１３分からの１３秒間、地球は“Ｐ－１３現象”に襲われるという。何が起こるか、論理数学的に予測不可能。その瞬間―目前に想像を絶する過酷な世界が出現した。なぜ我々だけがここにいるのか。生き延びるにはどうしたらいいのか。いまこの世界の数学的矛盾を読み解かなければならない。	
本日、サービスデー	朱川湊人	世界中の人間にはそれぞれに一日だけ、すべての願いが叶う日がある。それがサービスデー。神様が与えてくれた、特別な一日。本来は教えてもらえないその日を、思いがけず知ることになったら。直木賞作家の幸運を呼ぶ短編小説	表題の話より話題となった事件に関する様々な物を持ちあい、品評する集まりの「東京しあわせクラブ」が面白かった。
フェイク	楡　周平	白熱する頭脳ゲーム、最期に笑うのは誰だ！？岩崎陽一は、銀座の高級クラブ「クイーン」の新米ボーイ。昼夜逆転の長時間労働で月給わずか１５万円。生活はとにかくきつい。そのうえ素人童貞とは誰にもいえない。ライバル店から移籍してきた摩耶ママは同世代で年収１億といわれる。破格の条件で彼女の運転手を努めることになったのはラッキーだったが、妙な仕事まで依頼されて…。情けない青春に終止符を打つ、起死回生の一発は炸裂するのか。抱腹絶倒の傑作コン・ゲーム	斜め読みしちゃいました。
用心棒日月抄	藤沢周平	用心棒が赴くところにドラマがある――。故あって人を斬り脱藩。己れの命を危険にさらし、様々な人の楯となって生きる浪人青江又八郎の苛烈な青春。江戸は元禄、巷間を騒がす赤穂浪人の隠れた動きが活発になるにつれ、請け負う仕事はなぜか浅野・吉良両家の争いの周辺に……。凄まじい殺陣の迫力と市井の哀歓あふれる十話。	面白かった。

笑う警官	佐々木譲	札幌市内のアパートで、女性の変死体が発見された。遺体の女性は北海道警察本部生活安全部の水村朝美巡査と判明。容疑者となった交際相手は、同じ本部に所属する津久井巡査部長だった。やがて津久井に対する射殺命令がでてしまう。捜査から外された所轄署の佐伯警部補は、かつて、おとり捜査で組んだことのある津久井の潔白を証明するために有志たちとともに、極秘裡に捜査を始めたのだったが…。北海道道警を舞台に描く警察小説の金字塔、「うたう警官」の文庫化。	

○小林賢太郎戯曲集 STUDY　ALICE　TEXT
みっつの舞台から選ばれたコントの台本。
TEXT の、これはさすがにアドリブでしょーと思っていたところもきっちりとした台本だった。

○広告批評
絶版になっていて手に入らない。
戯曲集と二冊、図書館で借りた。
この本の中の一枚の写真、
私が最初に織った賢太郎です。

○大喜利猿「北海道」
以前の大喜利猿の舞台でのコバザルとヒデザルの回答集。答えの絵や文字が並ぶ。「大喜利猿」を見に行ったときに一人一冊配られた。この本を使って舞台の賢太郎と一緒に遊び、帰りの電車で読み切った。